

氏 名	にし おか みま お 西 岡 幹 雄
学位(専攻分野)	博 士 (経済学)
学位記番号	論 経 博 第 224 号
学位授与の日付	平 成 10 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	『マーシャル研究』

(主査)

論文調査委員 教授 八木紀一郎 教授 小島専孝 助教授 根井雅弘

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、近年利用可能になった初期マーシャルの草稿群を基礎にして、マーシャル経済学の復元を行おうとしたものである。

経済学者となる前のマーシャルを論じた第Ⅰ部「マーシャルの思想遍歴」は、伝記的事実の最新の調査結果を提供した第1章「マーシャルの前半生」と、初期論稿のなかの心理学関係の論文に見られる人間像の検討から彼の経済学への転換の動機を推測した第2章「道徳科学から経済学へ：とくにマーシャル心理学文書との関連で」からなる。第1章では、マーシャルが、祖父の代で没落に瀕しながらも、イングランド銀行での父の実直な勤務によって支えられた中産階級の一家に生い立ったことが、当時の家庭教育や学校教育を参照しながら物語られる。これは、ケインズの『マーシャル伝』を修正したとされるR・H・コースの調査結果をもさらに修正したほどの徹底した現地調査に支えられている。

第2章では、大学卒業後、道徳科学を教えはじめたマーシャルが経済学を生涯の研究対象に思い定めるに至る途上での心理学研究(「機械論」1868年など)の成果を吟味している。人間活動と物質的・社会的環境との関連を創造的・発展的なものとして研究するというマーシャルの根本的な志向に対して、この段階の心理学的考察は受動的なメカニズムの解明に止まるという限界があった。それに気づいたことがマーシャルに心理学を放棄させ、「経済的土台」の探求とともに「人間の能力のより高度な発展の可能性」をさぐる方向に転じさせたのではないかと、というのが本論文で示されている解釈である。

本論文の中心をなす第Ⅱ部「企業と産業の経済学としてのマーシャル経済学」は、第3章「初期価格理論の形成」、第4章「『産業経済学』における正常価格と市場価格」、第5章「『経済学原理』価格論の展開」、第6章「企業家と企業組織」、第7章「人間投資論と経済発展」の5章からなる。

第3章では、1871年執筆の「価値論草稿」を検討し、それが古典派の需給分析の批判から出発しているが、供給側(供給曲線)の時間を入れた分析に独自性があることが明らかにされる。マーシャルは経済学理論の数理化においてクールノーを先行者として意識していたが、供給の時間的分析のなかにクールノーの分析では捨象されていた時間的変動や不確実性をともなう産業のリアリティをとりこもうと努力していた。なお、「価値論草稿」では創業時の大規模投資(サンクコスト)を基礎にした収穫増の可能性が重視されているのに対して、アメリカ旅行以後の「国内価値の純粹理論」(1879年)では、産業集積の形成による外部経済の効果に重点が移行しつつあることが指摘される。

『産業経済学』を中心にした第4章では、スミス以来用いられた「自然的」という表現に代えて「正常的」という表現が使用されていることのなかに、自由競争や市場機構に対するマーシャルの見方とその理論的表現をさぐる。学位請求者によれば、そこには自由競争の積極的諸力とその成長可能性へのマーシャルの信頼が表現されている。約10年後の『経済学原理』(1890年)では、『産業経済学』段階ではなお乖離していた「連続性」と「正常性」の融合が達成され、そこでは「代替の原理」と「準地代」の概念が登場している。『経済学原理』の価格論は、「代替の原理」と時間要素がはたらく長期的な供給分析を主眼にしたものであるというのが、本論文の理解である。

第6章と第7章は、初期の経済学論稿から『原理』およびそれ以降（『産業と商業』）にいたるまでのマーシャルの探求を、企業論と人間投資論という二つの枢要点にしぼって考察したものである。学位請求者によれば、マーシャルは『産業経済学』で、初期の「監督賃金」論（1873年）に描かれた非力な企業家像から、内部留保資金を基礎にした資本家的企業家像に移行し、『原理』段階では企業の組織的余剰である「複合的準地代」を基礎に企業家と労働者の行動と資質への長期的影響が論じられることになる。マーシャルは、1870年代から労働者の人間的能力に対する投資が経済発展の基軸となることを表明していたが、これは『産業経済学』で「人的資本」として理論化される。これは『原理』を特徴づける「有機的成長論」のもとで、労働者の「生活規準」を形成する一環となる。この2章でとりあげられたトピックは、マーシャル経済学がイギリスの産業発展とそのもとでの貧困の解消を課題としていたことに密接に関わっている。

最後には、本論文の先行する部分とはスタイルを変えて、対比的考察、あるいは導入史の回顧からマーシャル経済学を位置づけた第Ⅲ部が置かれている。

第8章「アダム・スミスとマーシャル」では、マーシャルがスミス『国富論』を価値と成長の経済学として理解し、人的資本論においても前進的な経済発展観についても自己の先行者として位置づけていることを明らかにしている。第9章「ウォーカーとマーシャル」では、イギリスにおける「正統派」経済学の再建者としてのマーシャルが、アメリカで類似の役割を担ったフランシス・ウォーカーの探求と相互に影響しあったものであることを論じている。

そして終章「近代日本の経済学とマーシャル」では、マーシャルの講義を受けたり翻訳をした日本人や、マーシャル経済学の日本人経済学者による摂取のあり方か考察され、大正期から昭和初頭期にマーシャル独自の意義を確立するチャンスがあったか十分な成果をあげえなかったと論じている。

論文審査の結果の要旨

アルフレッド・マーシャルの経済学の研究は、最近、国際的にも、また日本国内でも、かなりの盛り上がりを見せている。それは、一つには、『産業経済学』（1879年）以前の草稿類が利用可能になったという資料状況と、いま一つは、組織や人間の能力とその進化を経済分析の中にとりこむという経済理論の研究方向が現れてきたことが関連している。本論文は、このような動向を反映し、マーシャル経済学の新しい像を描こうとした力作である。学位請求者は本論文の終章で過去の日本においてはマーシャル経済学の独自性がしばしば見失われたことを指摘しているが、本論文では、それを避けるべく詳細な現地調査によって『産業経済学』（1879年）に先行する初期草稿群の研究をおこない、マーシャルの経済学が、母国イギリスの産業的発展とそれを支える人的資質の開発への関心から生まれたことを明らかにした。本論文は、マーシャルの価格理論の形成を、1871年の「価値論草稿」から開始して論じているが、この最初の草稿における価格形成のタイプ分け自体に、小売・卸売・生産者レベルの区分が見られ、また大規模な初発投資のもとでの費用逓減が注目されている。また、マーシャルは、はじめからクールノーの業績を知っていて、クールノーのような抽象的数理化とは異なる産業的リアリティを探求したことも指摘されている。また本論文は、『産業経済学』の「正常価格」概念に、「定常状態」に向かうことを歓迎したJ・S・ミルとは異質の、先進市場経済の産業における「正常」な競争を評価し理論化しようとしたとマーシャルの経済観をみてとっている。これらは、たしかに従来のマーシャル像に訂正を迫る論点である。

本論文は、『経済学原理』までマーシャルの価格理論の発展を辿ったあと、企業家と企業組織、および、人的投資論についてそれぞれ独自の章をたてて論じている。マーシャルの企業家、企業組織像が次第に充実したものになるという議論も、またマーシャルの人的投資論が企業特殊な人的投資よりもより一般的な教育投資に向かったことについても、本論文は、当時のイギリスの産業事情と結びつけて説明を与えると同時に、現在の経済学の理論動向とも交錯する興味深い論点を提出している。

本論文の主要な価値は、上記のように、これまでは伝記的に、あるいはマーシャルの人間像（あるいは思想）的にしか語られて来なかった彼の産業論的視点・人間論的視点を、経済理論と結びつけ、価格理論および人的投資論にまで具体化して示したことにある。ただし、学位請求者が本質的と考える部分に絞って論じたためか、主著『経済学原理』の体系全体としての解明が欠けているのが残念である。本論文の視点を生かして、マーシャル経済学の実現しなかった体系全体への解釈を示すことは、必ずしも不可能ではなかったのではないか。

その他、本論文がマーシャル研究にもたらした貢献としては、R・H・コースのマーシャルの伝記的調査の誤りを正したこと、初期の心理学草稿の紹介、アメリカでマーシャルに並行して正統派経済学を再建したF・A・ウォーカーの再評価、教育制度史を消化して学史研究の有機的な部分として取り入れたこと、などがある。ボリュームの点では、近年のグローネヴェーゲンのSoaring Eagleに譲るとはいえ、本論文は、その資料的基礎の点においても、マーシャル経済学理解の斬新さの点においても、国際的レベルにある業績であり、日本の経済学史研究の水準の高さを示している。

よって、本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。なお、平成10年5月25日論文内容と、それに関連した試問を行った結果合格と認めた。